

令和6年1月5日

## 京口門だより No. 123

新年早々能登大地震や飛行機事故など思わぬ災いに見舞われました。被災の方々のご苦労はいかばかりでしょう。被災しなかった我々も身の引き締まる思いです。「日本海荒らぶに祈り年迎ふ」(森川暁水)

さて今月は2018年にノーベル賞を受賞された本庶佑教授のお考えを紹介したいと思います。「かなりのガンは治るか、慢性疾患になると思う。ガンは完全に消えなくてもよいのです。とくに老人は一定の大きさ以上に大きくならなければよい。その意味で半分以上のガンは解決するのではないか。組み合わせ療法も進んでいるし、もちろん化学療法も、放射線療法もその一つ。ただし主力は免疫療法だと思う」と主張しておられます。もちろん悪性で進行性のガンは強力な手段で対処しなければならないでしょうが、多くのガンは初期の抗癌治療(手術療法もふくめて)によって完全に治癒しなくとも、落ち着いた状態になれば、後は適切な治療によって進行しない状況で、様子を見ることができると言っておられるように思います。得てして、強力な抗ガン治療で強い副作用に脅かされながら、徹底的なガン征圧を目的としている場合が見られます。ガンは消えたがその人の命が脅かされてしまう、という非情な状況が生まれます。

本庶教授の言われるガンが慢性疾患になるということは、徹底的にガンを征圧しなくとも、大きな害をおよぼさなくなったガンは、ともに共存して生活すればよいし、免疫療法によってガンの悪化を防ぐことも、可能であるということであろうと思います。

私は漢方治療もこうしたガン免疫療法の一部を担うことができるように思います。実際ガンが完全消失しなくとも、漢方治療によって予想をこえて長く過ごされた方が何例もあります。実験研究の上でもある漢方薬には、ガンの成長を抑制する作用をもっていることや、抗ガン剤による副作用を軽減する作用があり、それらは人体の免疫系の働きによって作用しているという結果が得られています。

ガンも一つの慢性疾患、例えば糖尿病や腎疾患、慢性呼吸器疾患のように長く経過をみて治療が可能な病気であるという見方ができ、漢方薬もそれに一役買うことができるのではないかと思います。

